第 12 回

宝塚混声合唱団音楽会

2000年 7 月 1 日（土）　開演 6 ：00 P.M.

宝塚ベガホール

主催：宝塚混声合唱団

後援：宝塚市、宝塚市教育委員会

宝塚市文化振興財団、宝塚合唱連盟

＊＊＊ プログラム ＊＊＊

第１ステージ　マドリガル集より　モンテヴェルディ作曲

指　揮　大森　地塩

Se per haverne oimè donato　　ああ、もし愛を注げば
Cor mio! Mentre vi miro　　私の心の人よ
Si! ch'io vorei morire　　こうして死にたいものだ
Rimanti in pace!　　静かにとどまっておくれ
Ah! dolente partita!　　ああ！つらい別れ

第２ステージ　混声合唱曲「島よ」　伊藤　海彦作詞　　大中　　恩作曲

指　揮　大森　地塩
ピアノ　山本　京子

休　憩

第３ステージ　オペラアリアより

もう飛ぶまいぞこの蝶々（フィガロの結婚）　　フィガロ　晴　　雅彦
恋とはどんなものかしら（フィガロの結婚）　　ケルビーノ　福島　紀子
コンスタンツェよ、また会えるとは（後宮からの逃走）
ベルモンテ　神田　裕史
楽しい思い出はどこへ（フィガロの結婚）　　伯爵夫人　津山　和代
恋を知る男たちは（魔笛）　　パミーナ　津山　和代
パパゲーノ　晴　　雅彦
ピアノ　山本　京子

第４ステージ　Liebeslieder　愛の歌　ブラームス作曲

1．Rede, Mädchen,　　答えよ　乙女よ
2．Am Gesteine rauscht die Flut　　大波は岩辺にざわめく
3．O die Frauen　　おお　女達よ
4．Wie des Abends schöne Röte　　美しき真赤な夕日の如く
5．Die grüne Hopfen-ranke　　緑のホップのつる
6．Ein kleiner, hübscher Vogel　　小さな可愛らしい鳥が
7．Wohl schön bewandt　　以前私の生活は
8．Wenn so lind dein Auge　　汝の瞳がやさしく
9．Am Donaustrande　　ドナウ河岸辺に
10．O wie sanft die Quelle　　泉は草原を通って
11．Nein, es ist nicht auszukommen　　世人と親しむことは出来ぬ
12．Schlosser auf,　　さあ錠前師よ
13．Vögelein durchrauscht　　小鳥はざわめき通り
14．Sieh, wie ist die Welle klar!　　何と波が澄んでいることか
15．Nachtigall, Sie singt so schön　　小夜啼鳥がきれいに歌う

16. Ein dunkler Sachacht　愛は暗い抗
17. Nicht wandle, mein Licht　散歩するなかれ
18. Es bebet das Gesträuche　灌木林が揺れる

ソプラノ　津山　和代　　指　揮　大森　地塩
アルト　福島　紀子　　ピアノ　國井　美佐
テナー　神田　裕史　　村田　朋子
バス　晴　雅彦

ごあいさつ

本日は宝塚混声合唱団第12回音楽会へお越しいただきまして、誠にありがとう存じます。

宝塚混声では昨年５月ドイツへ行って参りました。花が一斉に咲き始めたザクセン州のライプツィッヒでは、バッハゆかりの聖トーマス教会のオルガン演奏を聴き、州都ドレスデンでは、当団の指揮者である大森地塩氏がかつてソリストとして活躍された、世界でも屈指のオペラ劇場“ゼンパーオーパー”を目の当たりにしました。その上、地元の教会で歌うという得難い機会をも持つことができました。私どもが日頃親しんでいるドイツ音楽の本場の雰囲気に接することが出来たのです。これらの貴重な体験は私どもの心の中で発酵を続け、歌の楽しみを一層味わい深いものにしてくれます。

さて、今回の音楽会は、プログラムにご覧いただけますように、多彩なステージ構成となっております。

モンテヴェルディのマドリガルは、少人数の合唱から全員合唱までのいくつかの組み合わせで演奏いたします。大人数合唱の中で歌う心地よさに甘えず、少人数のアンサンブルで積極的に歌に向かうことが歌う力を育んでくれるとの考えから、前回の音楽会に引き続きこのような試みにいたしました。

大中恩氏の「島よ」は、西洋の音楽を歌うときとはいくらか異なった、歌と直截に心が通う一体感を私どもに感じさせてくれます。このような心の在りようで西洋の音楽を歌うことが、いつの日にかできるようになりたいものだと思うのです。

ブラームスの愛らしく軽やかな舞曲集「愛の歌」は全２部33曲から成っておりますが、今回はその内第１部18曲を演奏します。これを豪華なソリスト陣と合唱の組み合わせでお楽しみいただきたいと存じます。加えて、声楽家の方々には別にステージをお願いして、モーツアルトのオペラからお馴染みの曲を歌っていただきます。しばらくの間、モーツアルトの典雅な世界に遊んでください。

アマチュア合唱団の本分は、技量の不足を補う旺盛な練習にあると考え、常日頃研鑽に励んでおりますが、お聴き苦しいところが多々あるかと存じます。どうぞ、忌憚の無いご批判をいただきますよう、又、これからもこれまで同様に暖かいご指導・ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成12年７月　宝塚混声合唱団

マドリガル集より　モンテヴェルディ作曲

Se per haverne oimè donato il core,
Nasce in me quell' ardore,
Donna crudel,
Che m'ard'in ogni loco,
Tal che son tutto foco;
E se per amar voi l'aspro martire
Mi fa di duol morire,
Miser! che far debb'io
Privo di voi,
Che sete ogni ben mio?

ああ、もし愛を注げば、
私にあの情熱がもえ上るが、
つれない彼女は、私をこがし
私は全身が火となる。
そして私があなたを愛するならば、
つらい責苦はその痛みで、私を殺す。
不幸な私は、どうすべきなのか。
あなたなしで、私の全ての財産は何なのか？

Cor mio! Mentre vi miro,
Visibilmente mi transform'in voi,
E transformato poi
In un solo sospir l'anima spiro.
O bellezza mortale!
O bellezza vitale!
Poi che si tosto un core per te rinasce,
E per te nato more.

私の心の人よ！私があなたを見つめる時、
明らかに私はあなたに変る。
そうしてやがて、心の息吹きは、
たんなる嘆息に変わる。
おゝ、死ぬほどの美しさよ！
おゝ、生命をよび起す美しさよ！
またたく間に、あなたは心に生命をとり戻させることが、できるからだ。
そしてあなたのおかげで生れると、
また死ぬのだ。

Si, ch'io vorei morire
Hora, ch'io bacio amoré,
La bélla bocca del mio amato core!
Ahi! cara e dolce lingua!
Datemi tant' humore,
Che di dolcezz' in questo sen m'estingua!
Ahi! vita mia!
A questo bianco seno
Deh! stringetemi sin ch'io venga meno!
Ahi bocca! Ahi baci! Ahi lingua! I torn'a dire:
Si! ch'io vorei morire!

こうして死にたいものだ、
わが愛するひとの美しい唇に
愛のくちづけをしているこの瞬間に。
ああ！いとしく甘美な舌よ、
この胸の心地よさで、私がなくなるほど、たっぷりと液を与えておくれ。
ああわが命よ！
私が気を失うまで、この白い胸に抱きしめておくれ。
ああ唇、ああくちづけ、ああ舌よ！
もう一度繰返しなさい、
こうして、死にたいものだと。

Rimanti in pace!
A la dolente e bella Fillida,
Tirsi sospirando disse.
Rimanti! Io me ne vò,

静かにとどまっておくれ！
悲嘆にくれる恋人フィリデアに、
ティルシは嘆息まじりで言った、
とどまっておくれ、私は行かねばならない。

Tal mi prescrisse legge,
Empio fat'! Aspra sorte e rubella!
Ed ella, stillando amaro humore
Hora da l'un ed altra stella,
I lumi affisse
Nei lumi del suo Tirsi,
E gli traffisse il cor
Di pietosissime quadrella.

Ah! dolente partita!
Ah! fin de la mia vita!
Da te part' e non moro?
E pur io provo
La pena de la morte,
E sento nel partire
Un vivace morire,
Che da vita al dolore,
Per far, che moia immortalment' il core.

このように、私は法律や無慈悲な運命によって
定められているから！
厳しい、反逆的な運命によって！
そして彼女は、両方の目から
つらい涙を流し、
その光は、彼女の愛するティルシの光に釘付け
となり、
また彼の心を、あわれみの矢で突きさす。

ああ！つらい別れ
ああ！わが生命の終りよ。
死ぬこともなく、あなたから離れるのか？
だが私は、死の苦しみを経験し、
私の心が永遠に死につくような
苦しみに、生命を与える
生き生きとした死を
この別れに感じる。

（訳　宝塚混声合唱団）

混声合唱曲「島よ」　伊藤　海彦作詞　　大中　　恩作曲

島よ
碧い日々に　とりまかれているものよ
時の波に　洗われているものよ
翼もなく　鰭（ひれ）もなく
涯てしなさに　うづくまるもの
距（へだ）てられ　ただひとり　耐えているもの
憧れと　虚しさ　あまたの眼に
みつめられているものよ

――島よ

☆

まぶしさに　吹かれながら
島は夢みる
波の言葉に誘われて　いつか
漂うことを。

見すてられた沈黙
その悲しみを断ちきって
ある日　ふと　魚のように
漂うことを。

――かすかに煙る　明日（あした）
沖の彼方の　煙る明日

ああ　だが
どこに行けるというのだろう
遠い昔からそうだったように
島は　さだめられたひとりを生きる

……なぜ　なぜ　なぜ
その孤独から　空にむかって
問いかける　樹々の緑
……なぜ　なぜ　なぜ
白く泡だつ声をめぐらし

島はひっそりと　重くなる
忘れられた　果実(このみ)のように

☆

降りしきる雨のなかで
島よ
おまえは傷ついたけもの
はてしない　波だつ荒野(こおや)の
罠(わな)に落ちた　小さなけもの

枝をしなわせ　葉むらを打ち
泥をこね　突き崩し　押し流す
雨、　雨、　雨、……
ああ　空と海との
まざりあうこの狂気
とめどなく　島を噛み　島を裂く　暗い力

そしてまた　島は失う
数しれぬ　昼と夜
そがれ　けづられ
いくだびも失いつづけたものを
岩と土　夢と砂とを

雨は降り
風まじり、雨はつのり
島は確かめる
ひとときごとに失われる自分を
島は濡れ　島は沈む
島であることの　いらだち
島でしかないことの　悲しみのなかに

☆

波の果て　陽が落ちるとき
赫(あか)々と身を染めて
島はおもう
遠い昔　炎だったことを
熱く溶けた　叫びだったことを
落日を身に浴びて
島はきく

わきたつ海の
その底をゆるがすひびき
島はきく
忘れていた　はるかな生命(いのち)
母なる岩漿(マグマ)の　ひとつの声を

――ああ
溢れ　こみあげ　ほとばしる岩漿(マグマ)
焼けただれ　とび散る　熔岩
灰と煙と　にえたぎる海
かけのぼり　走り　空をひきさき
かぎりなく
落ちて　落ちて　落ちつづける
灼熱の雪崩……

……菫(すみれ)、紫、薄墨色(うすずみいろ)
空は変り　風はひそみ
夜へ傾く時のなかで
島はあたらしくなる
呼びさまされた声を孕(はら)み
島は鮮やかに生きはじめる

☆

島は感じる
ふくか夜のむこうから
やってくるものの気配を
長い旅から　かえってくる風を
たえずあの　青空の告げていたもの
怖ろしいまでの優しさ
ときあかせぬ　大気の微笑を

島は感じる
やってくるものの気配を
見知らぬ一日が
吐息のようにひろがるのを

☆

島よ
のがれようもなく孤(ひと)りでいるものよ

心のなか　虚(うつ)ろな海に
浮かんでいるものよ
日ごと夜ごと　その身をそがれ
なお遠い　火の刻印(しるし)を守りつづけるものよ

島よ

おまえは　私ではないのか
散り散りの、人という名の
儚ない島――
私ではないのか

――島よ

Liebeslieder　愛の歌　ブラームス作曲

1．Red, Mädchen, allzuliebes, das mir in die Brust, die Kühle,
hat geschleudert mit dem Blicke diese wilden Glutgefühle!
Willst du nicht dein Herz erweichen,
Willst, du eine Überfromme, rasten, ohne traute Wonne, oder willst du, dass ich komme?
Rasten ohne traute Wonne, nicht so bittet will ich büssen.
Komme nur, du schwarzes Auge komme, wenn die Sterne grüssen,

答えよ　わが冷静な胸中に（汝）のまなざしをもつて
此の烈しい熱情を投げこんだ（ところの）あまりにも可愛い乙女よ、
汝は汝の心を和らげたくはないのか。
非常に敬虔なる汝は心からの歓びなくして止まらうとするのか、或は私がやつて来るのを欲するのか。
心からのよろこび無しにすますなんて、そんなにひどい罪は受けたくない。
さあ黒き瞳なる汝よおいでよおいで 星が輝く頃に。

2．Am Gesteine rauscht die Flut, heftig angetrieben;
wer da nicht zu seufzen weiss, lernt es unterm Lieben,

岸辺には大波がはげしくざわめく

ここで嘆息することを知らない人は、それを恋愛によって学ぶのだ。

3．O die Frauen, wie sie Wonne, Wonne tauen!
Wäre lang ein Mönch geworden, wären nicht die Frauen,

おお　女達よ　女性達はかくもよろこびをしたたらすものである。
遠の昔から彼女たちは僧侶であつたらよかったらうに。

4．Wie des Abends schöne Röte möcht' ich arme Dirne glühn
Einem, Einem zu Gefallen sonder Ende Wonne sprühn.

美しき真赤な夕焼の如く、可哀相な乙女たる私は灼熱し、
限りなく、誰かの意のままに歓喜の火花を散らしたい。

5．Die grüne Hopfen-ranke, sie schlängelt auf der Erde hin.
ie junge schöne Dirne, so traurig ist ihr

緑のホップのつる、それは地面をはって進み。

若き美しい乙女よ、なんと悲しそうな風をして

Sinn!	いるのだ！
Du höre, grüne Ranke! Was hebst du dich nicht himmelwärts?	お前、緑のつるよ！　聞け！　どうしてお前は天に向って高まら（起き）ないのか？
Du höre, schöne Dirne, Was ist so schwer dein Herz?	お前、美しき乙女よ、聞け、どうしてそんなに心が重いのか？
Wie höbe sich die Ranke, der keine Stütze Kraft verleiht?	つるよ、起きよ 誰も支えの力を与えてくれないのか？
Wie wäre die Dirne fröhlich, wenn ihr der Liebste weit?	どうしてその少女は楽しかろう、最愛の人が彼女から離れているのに。
6．Ein kleiner, hübscher Vogel nahm den Flug zum Garten hin,	小さな、可愛らしい鳥が果樹園の方へとんでいった。
da gab es Obst genug.	そこには果物がたくさんあった。
Wenn ich ein hübscher, kleiner Vogel wär, ich säumte nicht, ich täte so wie der.	仮りに私がその可愛らしい小さい鳥であれば、私はその鳥のようにするだろう。
Leimruten-Arglist lauert an dem Ort, der arme Vogel konnte nicht mehr fort,	そこにはわなが待伏せている（その）可哀相な鳥は最早前方に進めなかった。
Leimruten-Arglist lauert an dem Ort, der arme Vogel konnte nicht mehr fort, ……,	わながそこに待伏せている。（その）可哀相な鳥はそれ以上前方に進めなかった。
Wenn ich ein hübscher, kleiner Vogel wär, ich säumte doch, ich täte nicht wieder.	私がかりにかわいい、小さな鳥であったとしても、私はためらい、その小鳥のようにはしないであろう。
Der Vogel kam in eine schöne Hand,	その小鳥は美しい手に入った。
da tat es ihm, dem Glücklichen, nicht and.	その手の中で幸福者のその小鳥は悪い気持がしなかった。
7．Wohl schön bewandt war es vorehe mit meinem Leben, mit meiner Liebe,	以前には、私の生活、私の恋は非常にすばらしかった。
Durch eine Wand, ja durch zehn Wände erkannte mich des Freundes Sehe,	一つの壁を通して、否それどころか、10の壁を通してでも恋人の眼は私を認めたのであったが、
doch jetzo, wehe, wenn ich dem Kalten auch noch so dicht vorm Auge stehe,	悲しいことには、今では私がその冷たい眼のどんなに近くにいようとも、
es merkts sein Auge, sein Herze nicht.	彼の眼、彼の心は私に気づかないのだ。
8．Wenn so lind dein Auge mir und so lieblich schauet,	汝の眼がそんなにもやさしく、そんなにも可愛らしく私を見れば。
jede letzte Trübe flieht, welche mich umgrauet.	私を恐れさすすべての陰気さは一つ残らず消え去る。
Dieser Liebe schöne Glut, lass sie nicht	美しき情熱をそのまま飛散させるな。

verstieben!
Nimmer wird, wie ich, so treu, dich ein Andrer lieben,

いつの日にも私のように心から汝を愛する人は他にないであろう。

9. Am Donaustrande, da steht ein Haus, da schaut ein rosiges Mädchen aus.
Das Mädchen es ist wohl gut gehegt, zehn eiserne Riegel sind vor die Türe gelegt.
Zehn eiserne Riegel das ist ein Spass; die spreng, ich, als wären sie nur von Glas.

ドナウ河岸辺に一棟の家があり、そこにはバラのような乙女が外を眺めている。
その乙女は非常によく保護されている。十の鉄製の閂を戸口にかけている。
十の鉄製閂とは冗談ですぞ、
私はそれを恰もそれらが、ただガラスで出来ているかのように破り開くのだ。

10. O wie sanft die Quelle sich durch die Wiese windet!
O wie schön, wenn Liebe sich zu der Liebe findet!

泉がなんと静かに曲りくねって牧場を流れていることであろう。
愛と愛とが結び合うとは、何とすばらしいことであろう。

11. Nein, es ist nicht auszukommen mit den Leuten;
Alles wissen sie so giftig auszudeuten.

Bin ich heiter, hegen soll ich lose Triebe;

bin ich still, so heissts ich wäre irr aus Liebe, ……,

いやだ、世人と親しむことはできない。
彼等は全ての事柄を非常に悪く解釈することを心得ている。
（世人は）私が快活であれば、私が不正な欲望を抱いているという。
私が静かであれば、私が恋のために惑えるという。

12. Schlosser auf,und mache Schlösser, Schlösser ohne Zahl! denn die bösen, bösen Mäuler will ich schliessen, allzumal!

さあ、錠前師よ、錠を作れ。
無数の錠を作れ、というのは、私は劣悪な劣悪な、人間共の口を閉じたいのだ。

13. Vögelein durchrauscht die Luft, durchrauscht die Luft, sucht nach einem Aste;
und das Herz ein Herz begehrts, wo es selig raste. ……

小鳥は空中をざわめき通り、枝を探し求める、
そして、心は、それが幸福に休んじ得るような心を熱望する。

14. Sieh, wie ist die Welle klar, blickt der Mond hernieder!
Die du meine Liebe bist, liebe du mich

見よ！何んと波が澄んでいることよ！月が下にきらめいている。
我が愛しき人、汝よ、今一度私を愛しておくれ、

wieder!

15. Nachtigall, sie singt so schön, wenn die Sterne funkeln.
Liebe mich, geliebtes Herz, küsse mich im Dunkeln,……!

小夜啼鳥は、星がきらめく頃には、非常にきれいに歌う。
愛する恋人よ、私を愛せよ、闇夜にて私に口吻けせよ！

16. Ein dunkler Schacht ist Liebe, ein gar zu gefährlicher Brunnen;
da fiel ich hinein, ich Armer, kann weder hören noch sehn,
nur denken an meine Wonnen, ……, nur stöhnen, in meinen Wehn,……

愛は暗い抗であり、あまりにも危険な井戸である。
私はそこへ落ち込んだのだ、あわれな人である私は、聞くことも見ることも出来ず、
ただ私のよろこびに想いをよせ、私の悲しみの中に呻吟することしか出来ない。

17. Nicht wandle, mein Licht, dort aussen im Flurbereich!
die Füsse würden dir, die zarten zu nass, zu weich.
Alle (über-strömt) sind dort die Wege, die Stage dir;
so überreichlich tränte dorten das Auge mir……,

散歩するなかれ、私の光明（愛人）よ、その外の耕地地区で、
（もし散歩すれば）汝の足、柔らかい足がしめっぽく、あまりにも軟かくなるでしょう。
そこでは、すでに、（汝の道）、小径は（水に）満ちあふれて流されている。
そこで私の眼が非常に夥しき涙を流したのだ。

18. Es bebet das Gesträuche, gestreift hat es im Fluge ein Vögelein,…….
in gleicher Art erbebet die Seele mir, erschüttert von Liebe, Lust und Leide, gedenkt sie dein.

灌木林が揺れ、素速く小鳥がそれを掠めた。

それによって、私の魂は、よろこびと苦悩の愛にうちふるえ、
汝を想起するのだ。

（音楽之友社　ブラームス合唱曲集Ⅱより引用）